

第8回 twifull

Rohlf, Gerhard (1968) "*grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*"

2011.06.30

@jellyfish_chika

0. はじめに

本発表は上記文献の中から条件法について説明されている 593 節から 604 節 (pp339-349) を抜き出し、要約してまとめるものである。

条件法とは、「もし○○だったら××だったのに」という条件文における帰結節や、過去から見た未来について述べる文に使う動詞の活用の一つである。現代イタリア語では未来形が不定詞+助動詞 *avere* の現在形の活用で示される (*canterò, canterai, canterà...*) のに対し、条件法は不定詞+*avere* の完了形の活用で示される。(*canterei, canteresti, canterebbe...*) しかし、俗ラテン語から現代イタリア語に至るまでに条件法にもさまざまな変種が見られた。本発表ではそれらの変種について概観する。

1. 各形式について

1. 1 *cantaria* 型

1. 1. 1 概論

ロマンス語の条件法は不定詞+*have* に当たる助動詞の未完了過去で形成される。

ラテン語の未完了過去 *habebam* がイタリア語では *aveva* になったので、条件法の語尾は *-eva, -ea* になると推測される。実際、この形式はアレツォの詩やリグリア、ピエモンテの方言に現れる。

しかし、主に使われていたのはプロヴァンス語 (*cantaria*) やイベロロマンス語 (西 *cantaria*) と同じ *-ia* の形式だった。この形式はイタリア北部や昔のトスカーナの作家、南部においても見られるが、*-ia* という語尾が *habebam* (>*sic.avia*) にさかのぼれるのは *tela>tila* という変化のあった南部の端の地域のみである。

しかし、イタリア南部でのロマンス語の未来形が借用されたもので、他のロマンス諸語では *-ia* の条件法と未来形が共に発展すると仮定するなら、シチリアでの *-ia* の条件法の土着性にも疑いが生じる。そのことから南部での条件法の土着の形式がラテン語の直説法の過去完了 (*cantaveram>cantara, volueram>vulèra*) に由来しているということが付け加えられる。(この型についての詳細は 1. 7. 2)

条件法 *-ia* はシチリアの詩人によってより頻繁に使われた。そのタイプはメッシーナや少しの他の地域でも使われ続けていた。しかしもしシチリア島の大部分で本当に一般的な形式が *cantiria, putiria* ではなく *cantassi, putissi* であるという事実が考察されるなら、これらの形式は北部の影響によって使われることになったのだろう。

1. 1. 2 文学語とイタリア中央部での方言

トスカーナ文学において、**-ia** の条件法は**-ei** の形式に対して明らかに少数派である。ダンテは散文では**-ei** 型（これについては1. 2で詳細を示す）、詩では**-ia** 型を多く使っていたが、神曲では**-ei** 型をより多く使っていた。

-ia の条件法は今日ではトスカーナの一般的な話し手にはもはや知られていないようだが、トスカーナの近隣の地域、ラツイオ州北部やウンブリア北部、マルケ州では散見される。マルケ州では一人称単数の語尾が**-ia** ではなく**-io** になるのだが、これは現代イタリア語の **avere** の未完了過去である **avevo** の語尾の **o** と同じであるとされる。

また、コルシカでも**-ia** 型はとても普及している。

1. 1. 3 イタリア北部方言

北部でも、**-ia** 型条件法は一般的ではなく、不定詞と **habeo** の完了形 **habui** を組み合わせた**-ei** 型の条件法と共に使われていた。北部では**-ia** 型条件法は一人称、三人称単数で使われることが多いのが特徴的である。

現代の北部方言で**-ia** 型条件法がすべての人称で見られる例も出ているが稀であり、やはり**-ei** 型の方が使われている。

1. 1. 4 イタリア南部方言

南部ではこの型の条件法はシチリアの一部、カラブリア南部、ルカニア、ナポリ、プッリャ北部に普及している。

著者はシチリアの **San Biagio Platani** でこの型の完全な活用の例 (**pruvirria**, **-iatu**, **-ia**, **-iamu**, **-iatu**, **-ianu**) を採取したが、インフォーマントによるとやはり使われることは少ないという。また、この **pruvirria** という形には典型的なトスカーナ文学語を模倣した印が現れている。

この地域では**-ia** 型よりも**-ei** 型との混合型（1. 4参照）が優勢だった。

1. 2 不定詞+habui 型 (-ei 型)

俗ラテン語ではもともと **cantare habui** が条件法過去、**cantare habebam** が条件法現在としての立場を持っていたようである。しかし8世紀にはすでに **committere habuit** が条件法現在としての役割を持って現れていた。トスカーナ方言での語尾**-ei**, **-esti**, **-ebbe**, **emmo**, **-este**, **-ebbero** は **avere** の完了に対応していた。古い形では一人称単数でたびたび**-ebbi** という語尾が、一人称複数では**-ebbemo** という形が見られた。三人称複数では完了形が揺れていたことの類推から、条件法語尾も**-ebbero** と**-ebbono** で揺れていた。この形の条件法はローマより南では使われていなかった。

北部ではこの**-ei(-ebbi)** という語尾は**-ev**, **-ef** に対応している。たとえば、ベルガモ方言では **avrei** が **avref** のようになる。そのうえ、**e** の代わりに **a** や **o** が現れる例も頻繁

である。現代イタリア語 *vorrei* に対してパドヴァでは *voravi*, ロンバルディアでは *vorovi*, など。しかし現代の方言では他の型の条件法に押され、著しい後退を見せているという。

1. 3 -ss-を持つ類推による形式

条件法現在 *vedreste* と接続法未完了過去 *vedeste* (共に二人称複数) の類似性から、*vedesimo* の類推で *vedressimo* が使われる。この形が使われるのは特にラツィオ州北部、ウンブリアの一部、トスカーナ南部である。この形の拡大は他の方言が *-sti* と *-ssi*, *-si* をとって変えたという事実の後押しされる。

現代の方言でもいくつか使われている地域があり、ボローニャはもっとも古い形式を保っている：*truvref, -res, -ref, -ren, -resi, -ren*。逆に、アブルッツォは二人称単数と二人称複数においてのみこの形を残している：*avre, avrisse, avre, avresseme, avreste, avre*

1. 4 *cantare habebam* と *cantare habui* の混合

イタリアの一部の地域ではこの二つの型の混合型、要するに *averia, -isti, -ia, -essimo, -este, -ia* (マルケ州) のような活用が見られる。

また、同じ混合型でも人称によって違うのではなくこの二つを合成した *verrebbia* < *vorria* + *vorrebbi* ' *vorrei* ' のようなタイプもある。

1. 5 -rr-を持つ形式

古いトスカーナ方言の未来形では、たびたび *-r-* の代わりに *-rr-* が現れることがあったのだが (現代伊語 *faro*, 古ピサ方言 *farro*)、それと並行して条件法でも *-rr-* が現れることがあった。未来形同様、同化と語中音消失に伴う子音の長音化によってこの形は生まれた。：*vorria* < *volria*, *verria* < *venria*...

1. 6 分析的な条件法

かつての北部方言では不定詞と *avere* が分かち書きされた形で未来形があらわされていた。この場合、助動詞は前接語としてではなく、不定詞の前に置かれていた。：*"a portare"* (*porterà*)。これと同様に条件法にも分かち書きの形式が見られた。：*"have offende"* (*offenderei*), *"have fa"* (*farei*)。また、*"eo me perderève e caze"* (*io mi perderei e cadrei*) のように、一つの助動詞で二つの不定詞を支配する例もあった。

1. 7 cantàra, avèra 型 (-ra 型)

1. 7. 1 概論

このタイプの条件法はラテン語の直説法過去完了が元になっている。

(cantaveram>cantara) トスカーナ詩では-ia 型、-ei 型と共に使われているが、古フイレンツェ方言で現れるこの型の条件法はもともとは南部から入ってきたものと思われる。この形が生まれたのはイタリア本土の南部だと推測されるが、イタリア中部に位置するウンブリアでも土着の形式だったようである。しかしこの形はいまだにアブルツォ北部でも使われており、トスカーナとウンブリアの州境で生まれたという可能性も残っている。

北部ではこの形の痕跡はもはや見られず、中世のフランコプロヴァンス語の影響を受けたテキストに見られるのみである。

1. 7. 2 南部方言

fora(<fuera)も含めて、古いイタリアのテキストに現れているこの形式は南部でも使われていた。本来、cantàra, avèra のようにアクセントは語尾につくが、-ere で終わる型の動詞の場合、アクセントが語幹に移る例が見られる。このアクセントのつけ方は完了形のアクセントのつけ方 (potui>pòtti) や、ラテン語での語幹にアクセントがあるもの (miseram, feceram) に由来しているとされる。

イタリア本土南部では現代でもこの型の条件法が根付いている。しかし今日では-ara の語尾は-era に取って代わられている。

カラブリアでは-erra という語尾が広く普及している。これは1. 4と同様に、同化と語中音消失によるものだ。また、それとは別に合成型の条件法も存在している。:

"furria"<furra×sarria(sarei)

1. 8 条件法の欠如

南部の大部分（と北部の一部）では迂言的な未来形は一般的に使われていなかったのと同様に、これまで述べてきたような形態を持つ条件法はあちこちで定着しているわけではなかった。サレントやプッリャ州の南部ではギリシャの影響によって直説法半過去を条件法として使っている。

一方、シチリアで最も一般的なのは vurria や vurissi のような条件法ではなく、接続法未完了過去である。

2. まとめ

本発表ではイタリアの各地域における条件法の様々な形式とその歴史的な成り立ちを見てきた。それぞれが相補分布をなしているわけではないのではっきりと言うのは難しいが、現代も使われている-ei型は北部～中部、-ra型は南部ということがまず言える。-ia型については様々な説があるようだが、あまり多くの文献を見ることができなかつたため今後の課題としたい。

3. 参考文献

Bourciez, Edouard *Elements De Linguistique Romane* (french & European Pubns, 1967), pp516-517

Rohlf, Gerhard *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti* (Torino: Einaudi. 1968), pp339-349

ジュゼッペ・パトータ (橋本勝雄訳) 『イタリア語の起源 歴史文法入門』(京都大学学術出版会 2007) , pp161-163

長神悟「条件法をめぐって」『イタリア学会誌』(30) (19810331) pp75-92